

「核データのパッションとミッション」 JENDL-3以降の核データ活動計画の検討に参加しての感想

東大工 中沢正治

1. 経 過

日本の核データ活動が原研、動燃、大学、産業界などの自発的横型組織の連携かつ献身的尽力により JENDL-1, 2, 3 という核データライブラリーを作成してきたという他に余り類を見ない輝かしい実績を持っていることは大きな誇りである。シグマ運営委は、この歴史を維持発展させるため、JENDL-3 以降の核データ活動計画等の作成を若手グループ（長谷川、水本、中川、片倉、吉田(正)、中沢）に命じた。その結果や検討経過については、JAERI-memo 61-330にまとめたし、原子力学会（昭和62年会）にても講演の機会を得た。ここでは、それを繰り返す程のスペースもないので、筆者個人の感想等をまとめることとし、従来の公的な報告の補足としたい。

2. パッション

それにしても、「これだけ核データ活動がウマクやってきた秘密とか仕組みはどこにあったのであろうか？」という点が筆者の最大の関心事であり、パッションであった。何か、核データには核分裂の発見、新素材の発見などに通じるような挑戦的なイメージがあるのだろうか？ それとも、本来、核データは珠玉のごとく高価なものなのであろうか？ あるいは仲間との乾杯の肴かしら？

以前より、少しは事情通になったような気がするのですがやはりうまくは説明できないし、その方法論を体得したとは思えない。理工学研究のパッションには、二種類あるというのは筆者の私見である。一つは個人的興味、アイデアを優先する考え方で理学的なもの、もう一つは人間を幸せにするため、生活を豊かにするための道具を開発していく工学的なものである。核データは両方のパッションを兼ね備えているということなのであろうか？

この核データ分野特有の性格のためであるとしたら、ここでの組織論、戦略を将来や他分野へ応用することは困難である。しかし多くの先達のパッションを核データに集約させた「高速炉開発国産化路線」と人材配置のタイミング等については多いに見習う必要があるし、核データの伝統を考えてよいであろう。

3. ミッション

今回の答申は、核データに対する各分野からの期待、つまりミッションをまとめたものとなった。それは、「特殊目的ファイルによる多様ニーズ対応とデータブックなど流通性の追究」、「次世代核データへの投資」と「核データ活動の日常基盤整備」となった。

このミッションに対し、従来のパッションを変更せずにやっていけるかどうかは深い考察が必要である。新しいミッションには、新しいパッションの創出による対応が必要であるというのは、筆者の私見であるかも知れないが常識的なところでもあろう。学術情報データベースの高度知的活用システムの追究は、21世紀に向けての新しいパッションであり、パソコン中年のターゲットにふさわしいと想像している。（なお、パソコン学生はこの頃ハードの方が面白いと言い始め、何か回帰現象が散見されます。）

各時代におけるパッションとミッションのバランスが幸福のメジャーであるとしたら、今までの、そしてこれからの核データ研究者は本当に幸せであると、そしてそうあって欲しいと願い、今回のミッションを果してはっとしているところです。